



Title	類像性の論理：模型の人類学（その2）
Author(s)	中川， 敏
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2019, 45, p. 163-175
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71839
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

類像性の論理——模型の人類学（その2）

中 川 敏

目 次

1. 序
2. パースの記号論
 - 2-1 記号論と記号学
 - 2-2 記号の分類と自然化
 - 2-3 文化と自然
3. 推論
 - 3-1 ポパー
 - 3-2 ヒューム
 - 3-3 類似と指標
4. 写真論再訪
 - 4-1 透明性テーゼ
 - 4-2 人間化された因果論
 - 4-3 反事実的条件法
5. 結論

類像性の論理——模型の人類学（その2）

中 川 敏

1. 序

この短い論文は「似ているとはどういうことか ——模型の人類学（その1）」[中川 2018]（以下「その1」と呼ぶ）の続編である。この論文のテーマは、「その1」と変わっていない——「似ている」とはどのようなことかを考えようというのだ。この論文（「その2」）では「似ている」ことを、「類像性」(iconicity)（「類似記号」）という概念を導入して考えてゆきたい。「類像性」、「類似記号」はパースの記号論由来の語である。パースの記号論を導入して、「その1」の議論をより深化させるのが、この論文の目標である。そうすることによって人類学の「自然化」(naturalizing anthropology) という流れの道筋をはっきりさせようというのが、この論文のより理論的な目的である。「自然化」とはすべてを自然的関係の中に、自然科学の対象とするような自然的関係の中に取り込む、そのような戦略である。「人類学を自然化」するとはすなわち文化を特別扱いせずに、自然の一部として述べてゆく、そのような戦略である。

2. パースの記号論

パースの議論がこの論文で大きな意味をもつことになる。あらかじめ宣言するが、わたしはこの論文で「パース学」をする予定はない。この宣言は二つの言い訳を含んでいる。一点は、わたしのパース理論に対する態度は「チェリーピッキング」（いいとこ取り）であり、彼の理論の全体像を把握しようというものではない、ということである。もう一つは原典にあたるべき箇所でも二次文献ですませるという点である。

パースは、記号のいくつかの分類を試みている。この論文で焦点をあてる「類似記号」は三番目の分類の中に出てくる。その分類に従えば、記号は次の三つになる——(1) 類像性（類似記号）(iconicity)、(2) インデキシカルティ（指標記号）(indexicality)、そして(3) 象徴（象徴記号）(symbols) である [パース 1986: 12-13]。

2-1. 記号論と記号学

パースによる記号のこの分類（類似記号、指標記号、象徴記号）は自然化の鍵となる、

そのような重要性を秘めている。その重要性を示すためには、パースの記号論 (semiotics) とソシュールの (あるいは構造主義の) 記号学 (semiology) とを対比する必要性がある。

ソシュールの記号学の、あるいはより一般的に構造主義の、中心教義 (セントラルドグマ) は恣意性である。ソシュールは言語から出発し、その理論を記号一般へと拡張した。言葉の意味はシニフィアン (能記) とシニフィエ (所記) の結び付きであり、その結び付きは恣意的である。この恣意性 (シニフィアンとシニフィエの結び付きの恣意性)こそが構造主義の中心教義なのである。

小さいモノを意味 (シニフィエ、所記) として持つコトバ (シニフィアン、能記) が小さいわけではない。イリオモテヤマネコはゾウより小さいが、シニフィアンとしての「イリオモテヤマネコ」は「ゾウ」よりも小さくはない。繰り返すが、これが恣意性である。もし結び付きが恣意的でない、すなわちそれが自然であるような言語があるならば、そのような言語ではコトバと意味にはなんらかの関係 (「有契性」(motivatedness)) があることになる。その時自然は文化 (言語) に写像されることとなるだろう。恣意性という教義は「そのような写像はない、文化は自然から独立である」という保証をわれわれに与えているのである。

構造主義の人類学が文化の体系を自然の体系と峻別して扱える (そして扱うべきである) 理由こそがこの恣意性なのだ。自然の体系が (自然科学がその探求の対象とする) 因果関係だとすれば、記号の体系こそが構造主義がその探求の対象とする構造なのだ。それは文化であり、そして伝統である。

パースにとって記号とは何かの代わりをするものすべてである。例として、彼はつぎのようなものを挙げる: 「代表者、代理人、代人、代理行為者、神の代理としての教皇、図表、兆候、貨幣、説明書、概念、前提、声明」[パース 1986: 9]。これらの例から明らかのようにパースにとって言語は記号の中でなんら特権的な位置をもつものではない。パース的見地に立つてドヴァールはソシュール記号学を次のように批判する。「ソシュールにとって記号論とは記号の理論ではあるが、〈言語〉記号のみの理論である。それらの言語記号は恣意的であり、非言語的な何ものからも独立の構造を作り上げ、伝統の力によってその存在が保たれる。他の人たちがのちにソシュールの記号の理論を非言語的な記号活動に応用したが、その主な前提には手をつけなかった。そこに大部分の問題があるのである」[ドヴァール 2017: 117-118]。パースにそのようなこだわりはない。彼は言語を扱うと同時に、たとえば風見鶏について、あるいは縞馬について、語る。パースの体系の中で言語はなんら特権的な位置は占めない。

ソシュールの記号学の見地からパースの記号論を見てみよう。パースの分類 (類似記号、指標記号、象徴記号) のうち象徴記号のみがソシュールの記号学の枠内にはいるものであり、指標記号と類似記号はそれらが恣意性に基礎を置くものではないがゆえに記号学、すなわち構造主義の外側に置かれた。それらは文化とは無縁の自然の領域の事象であり、「記号」の名にふさわしいものではないのだ。

ソシユールの記号論は、ソシユールの記号学の対象（象徴記号）に単に指標記号と類似記号とを加えたものと映るかもしれない。そうではない、と私は主張したい。パースの記号論はソシユールの記号学を自然化したものだ、と主張したいのである。「自然化」とは、すでに述べたように、すべてを自然的関係の中に、自然科学の対象とするような自然的関係の中に取り込む、そのような戦略である。すなわち自然化とは構造主義の対極にある考え方なのだ。

自然化の中で読むパース記号論（それが正しいパースの読みかたとは主張しない）は、ソシユール記号学とはまったく違うものとなる。恣意性はそれ自体として独立せず、むしろ指標記号や類似記号と同じ原理（自然科学の原理）に立つものと見なされる。象徴を自然から説明するとは、（構造主義の大前提である）文化の独自性を否定することとなるのだ。

2-2. 記号の分類と自然化

パースの記号の分類 —— 類似記号、指標記号、象徴記号についてあらためて見ていこう。

類似記号（アイコン）はそれが持つ特性だけによって、その対象（記号学で言うところの「シニフィエ」である）と関係するものである、とされる。指標記号は対象との何らかの関係に基づく記号である。象徴記号はソシユールの記号学の扱う記号そのものであり、繰り返すが、恣意性がその特徴である。構造主義の議論をもう一度だけ繰り返そう —— 恣意性は（自然とは違う）秩序の体系（文化、伝統）を構成するのである。

類似記号はそれが対象に似ていることによって、指標記号はそれが対象と因果関係にあることによって、そして象徴は対象と規約による関係にあることによって、対象を表象するのである。火を表象するのに、赤いモノや炎の絵（類似記号）を使うこともあれば、煙（指標記号）をもってすることもある。そして「ヒ」という音（象徴記号）をもってそうすることもできる。赤いモノは火に似ているし、煙は火と因果関係にあるし、そして「ヒ」という音は規約によって火との関係が保証されている、というわけである。

自然／文化の軸でパースの分類を整理しておこう。指標記号（因果論）が自然に属し、象徴記号（恣意性）が文化に属する。類似記号が、いわば、浮いている状態である。構造主義的見地からすれば、類似記号を文化に組み込む必要があるし、自然化的見地からすれば類似記号を自然に組み込む必要があることとなる。問題は、どちらから見ても、「似ている」とはいかなることか、ということになるのだ。

2-3. 文化と自然

「その1」ではまず構造主義の側からの議論を紹介した。「類似」を見出す「無垢の眼」[Goodman 1968: 8] など存在しない、という主張である。何かと何かはある概念枠組（文化や伝統）を通してはじめて似ていると言えるのである。無垢の眼ではなく、なんらか

のフィルター（概念枠組）を通してはじめて類似が浮かび上がる、という主張である。二つのモノは文化の中で、あるいは伝統の中で、「似ている」のだ、という議論である。その考え方からすれば「リアリズム」とは表象（絵画など）と対象の関係ではなく、表象と対象そして概念枠組（伝統ないし文化）の三項の間の関係となる。

構造主義の戦略は、（パースの記号論の用語を使えば）類似記号を象徴記号に含ませようというものである。指標記号はもともと構造主義の関心の外側にある。このようにして、すべての記号が文化のもとに統合されることとなるのである。

「その1」の後半部は、構造主義の試みの逆、すなわち類似記号を指標記号のもとに統合しようとする試みである。「自然化」の試みであるこの論文では、「その1」論文での自然化の試みをより徹底してゆきたい。

すべてを（類似記号も象徴記号も）指標記号とする、因果関係で説明するためには、「因果関係で説明する」ことの解明から始めなければならない。

3. 推論

「因果関係で説明する」とは「帰納」という推論である。推論のモードについてまとめておこう。推論には普遍から個別に向かう演繹推論と個別から普遍へと進む帰納推論とがあると通常言われる。パースはそれら二つとは違う三番目の推論の様式として「アブダクション」(abduction)を提案した。それはしばしば「最善の説明への推論」とも呼ばれる方法である。ハッキングはアブダクションについて次のようにまとめる——「それはなんらかの現象に直面したときに他の方法では説明できない事柄を分かるようにする（おそらく最初からいくらかのもっともらしさを備えている）説明を一つ見出すなら、その説明は多分正しいと結論すべきである、という考えである。」[ハッキング 1986: 119]

3-1. ポパー

わたしは、パースの「アブダクション」をめぐる議論はポパーが『推測と反駁』[Popper 2002 (1963)]で展開した議論と同じものと見なす。

ポパーの議論は帰納法の否定からはじまる。ヒュームに賛成しながら、ポパーは帰納を正当化する方法はないとする。「帰納という（観察に基づく）推論は神話である。それは心理的な事実でも、日常生活の事実でも、科学的手続きの事実でもない」[Popper 2002 (1963): 53]。帰納に代わる科学的方法としてポパーが示すのが「推測 (conjectures) と論駁 (refutations)」である。彼はそれを次のようなダイアグラムで表現する [Popper 2002 (1963): 406]。

$P1 \rightarrow TT \rightarrow EE \rightarrow P2$

(P1) 問題が起きる、それに対してわれわれは (TT) 試験的理論 (tentative theory) を作る。さらにその理論から (EE) 誤りを排除する (error elimination)、そして、(P2) あらた

な問題が発生する——というのだ。

ポパーの関心はこの理論が科学的であるためにはどのような性質を持つべきかにある。この線引き問題はこの論文では扱わない。わたしが強調したいのは「推論と反駁」の最初の二つのステップ、問題が起き、それを説明する理論をつくりあげるという二つのステップに注目せよ、ということである。ポパーの言う「推論と反駁」とは、パースの言う「アブダクション」に他ならない、とわたしは主張する。ここでポパーの議論（「帰納など存在しない」）を採用した上で、推論全体をパースの用語（「アブダクション」）でまとめよう。すなわち、推論は二種類だけである、演繹（デダクション）とアブダクションとである、と。

3-2. ヒューム

ポパーは、ヒュームによる帰納についての批判を評価している。「帰納を正当化できない」というヒュームの結論を受け入れるのだ。ヒュームによれば、わたしたちは同じようなことが繰り返し起こるという心理的傾向性をもっているという。そしてこの心理的傾向性こそが帰納を支えるものであると言う。ヒュームの言っていることは、けっきょく、因果関係は世界の中にあるのではなく、心の中にあるということになる。

ポパーは、しかしながら、ヒュームの心理学的説明を批判する [Popper 2002 (1963): 42]。「ヒュームの議論の中心的アイデアは類似 (similarity/resemblance) にもとづく反復にある」 [Popper 2002 (1963): 44]。問題はこの二つの概念、類似と反復があまりに無批判に使われていることだ、とポパーは言う。それらは「われわれにとっての類似」、「われわれにとっての反復」であることを忘れてはならない、とポパーは言うのである。

言葉尻だけを捉えれば、「われわれにとっての類似」（あるいは「われわれにとっての反復」）は構造主義者の使う言葉だと言えるだろう。似ているのを規定するのは文化（伝統、構造）だ、と構造主義者はいう。

ポパーは文化の違いではなく、まずは種の違いから議論を始める。犬は犬なりの類似を、そして犬なりの反復を見るだろう、と。類似や反復は、あくまである観点 (point of view) から見た類似や反復だというのだ。類似や反復はそこにあるのではなく、わたしたちの予測や解釈の産物としてそこに存在するのである [Popper 2002 (1963): 45]。

ポパーが「観点」という考え方を導入して帰納法を退け得たとはわたしには思えない。むしろ、このような「観点」を導入して帰納法の本来の姿をあきらかにした、とわたしは考えたい。その「本来の姿」とは、けっきょく、「推測と反駁」（すなわち「アブダクション」）と重なるものである。

帰納法の例としてしばしば挙げられる「太陽が東から登る」という法則を考えてみよう。〈一昨日も太陽が東から登った。昨日も太陽が東から登った。そして今日も太陽が東から登った。だから明日も太陽は東から登るだろう〉という推論である。「一昨日も太陽が東から登った」と描写される状況を思い描いてほしい。その時「太陽が東から登る」以外にもいろいろなことがあった筈だ——隣の犬が鳴いていたかもしれない。雨が降ってい

たかもしれない。お腹が痛かったかもしれない。一昨日の状況と昨日の状況そして今日の状況の中に「太陽が登る」という類似性、そしてその反復を見出すのは、じつは、至難のわざなのである。パースの主張する本来のアブダクションに近い言い回しになると思うが、そこに類似性を見出すのは、むしろ法則を予感しているからだ。法則を予感させるような観点が類似性を生み出し、類似性が法則を生み出すという、コインの裏表のような関係がそこに見出せる。そしてこのように言い換えれば分かるように、観点からなる帰納法あるいはアブダクションとは、「推測と反駁」のダイアグラムの中の「TT」、すなわち「試験的理論」に他ならないのである。

ポパーによる観点（予測・解釈などなど）に基づく帰納（アブダクション）を「人間化された因果論」と呼びたい。われわれはあらかじめそこにある因果を見出すのではなく、そこに因果を作り出してゆくのだ。

3-3. 類似と指標

パースに戻ろう。類似記号、指標記号、象徴記号の三分類についてである。類似記号と指標記号は区別が難しい。パースはいくつかの例をだして、その区別を明晰にしようと試みている。

湿った空気中で晴雨計が下がれば、それは雨の指標記号である。つまり、湿気で下がった晴雨計と近く降る雨との間のありうる結合を自然の力が確定しているとわれわれは想像する。風見鶏は風の方向の指標記号である。その理由は、第一に風見鶏が風と同じ方向を実際にとり、その二つのものの中には現実の結合があるからであり、第二に、われわれは一定の方向を指す風見鶏を見ると、それがわれわれの注意をその方向に引きつけ、風見鶏が風によって向きを変えるのを見ると、心の法則によってどうしても方向は風に結びついていていと考えざるをえない、といった具合にわれわれ人間ができていているからである。[パース 1986: 38-39]

指標記号を因果論と考えれば、晴雨計はその典型例と考えうる。ポイントは因果論が空中に浮かんでいるわけではなく、あくまで「われわれ」を通しての因果論だということである。風見鶏の例はそれを強調する。因果論は飽くまでわれわれによって人間化された因果論なのである。

続いて1ヤードちょうどの棒（ヤード竿尺）を考えてみよう、とパースは言う。

ヤード竿尺はちょっと考えるとヤードの類似記号と思われるかもしれない。なるほど、一ヤードと見られ評価されうると同じ程度の近さで一ヤードを示そうというつもりだけならばそうかもしれない。しかしヤード竿尺の目的そのものは、見かけによって評価されうるより正確にヤードを示すことである。そしてこれを実行する

ためには、ヤード原器と言われるロンドンにある棒との正確な機械的比較を行わなければならない。そういう訳でヤード竿尺に表意体という価値を持たせているのは現実の結合であり、したがってそれはただの類似記号ではなくて、指標記号である。

[パース 1986: 39]

いささか分かりにくいのが、おそらく次のようなことをパースは主張しているのだろう。この棒を見て遠く普遍的な「1 ヤード」を想像する・・・というような場面ならば、この竿尺は類似記号であろう。しかしヤード原器からこの竿尺が作られてくる様子を考える時、それは指標記号となる。ここでも人間化された因果論が、すなわちアブダクションが問題となっているのだ。

4. 写真論再訪

以上の道具立てをつかって「その1」論文の後半部を徹底した自然化の議論として組み立てなおそう。「その1」論文は、典型的な類似記号とされる絵画を指標記号として読み直す、そのような試みである。

4-1. 透明性テーゼ

そのためにウォルトンの写真論、「透明な絵」([Walton 1984]) をてがかりにした。ウォルトンの議論は「写真は透明である」という(彼の言うところの)透明性テーゼを中心に展開される。「透明性テーゼ」とは写真は(眼鏡が透明であるように)透明である、というものである。わたしたちは眼鏡をかけても現実とのコンタクトを失うことはない。眼鏡をかけて見ているのは眼鏡ではなく現実である。それは眼鏡が透明だからだ。ウォルトンは言う、写真は眼鏡と同じく透明なのだ、と。わたしたちは写真を見ているとき、写真を見ているのではなく、(透明な写真を通して)現実を見ているのだというのだ。わたしたちは(眼鏡同様に)写真においても現実とコンタクトを保ったままである、と彼は主張する。

ウォルトンは写真の透明性を支持する二種類の論証をする。そのうちの 하나가「すべりやすい坂道」議論である。(もう一つは「反事実的条件法」であるが、これについては後述する。) いったん眼鏡の透明性を認めれば、双眼鏡の透明性を認めるに困難はないだろう、とウォルトンは言う。双眼鏡に透明性を認めれば、望遠鏡に透明性を認めないわけにはいかないだろう。いったんすべりはじめれば、坂道はどこまで行くことができる。写真は眼鏡からはじまった坂道の行くつく先なのだ、というわけである。

わたしはウォルトンの議論にのっとりながら、議論の対象を写真から絵画へと広げた。すなわち、「絵画もまた透明なのだ」と。写真まですべり降りれば、もはやそこで止まる必要はないだろう。絵画もまた透明なのだ、と。

以上が「その1」論文の（反事実的条件法を除外した）概略である。

この論文で指摘したいのは、「透明である」という言葉で指していた現実世界とのある関係こそが、じつは「指標性」（インデキシカルティ）なのだ、ということである。絵画は類似記号ではなく（対象に似ているのではなく）、指標記号なのだ。それは因果論的に対象と結びついているのである。

4-2. 人間化された因果論

「因果論」あるいは「因果的關係」という言葉であらわされる関係を、この論文ではパースの『推測と反駁』そしてパース自身の「アブダクション」の議論を通して「人間化された因果論」という言葉で精緻化してきた。わたしが主張したいのは「その1」論文でいささか歯切れのわるかった「反事実的条件法」の議論は、「人間化された因果論」に置き換えることにより、その曖昧さをなくす、ということである。

ここで、パースの写真論を見てみよう。パースは写真を指標記号と考えていた。

写真、特にスナップ写真は非常に有益である。というのは、それらは表意している対象にある点でまったくよく似ているということをわれわれが知っているからである。しかしこの類似性というのは、写真が一点一点物理的に自然と対応するよう強いられるという状況のもとで作られたという事実によるものである。そういう点で、それらは記号の第二のクラスつまり物理的結合による記号のクラスに属する。[パース 1986: 35]

写真を記号として見るとき、大事なのは写真が被写体に似ているという事実（類似性）ではなく、その類似が因果論的に構成されているという点なのだ。

興味深いのは、写真を論じたその場所で、パースが不思議な例を出していることだ。

縞馬は強情なあるいは不快な動物であるらしい、なぜならばロバに大体似ており、ロバは身勝手だからである、と私が臆測するような場合は別である。こういう場合、ロバは縞馬のありうる類似物として役立つ。このような類似が遺伝に物理的な原因を持っていると考えるのは正しい。しかしそうだとした場合このような遺伝的類縁そのものは二種類の動物間の類似性からの推測にすぎず、その二種類のものの生産の状況については、(写真の場合とは違って) われわれは独立した知識を持っていない。
[パース 1986: 35]

ロバが縞馬を表示するその仕方について述べている——それが類似記号なのか指標記号なのかが論点である。この類似は写真（因果にもとづく指標記号）とは違う。なぜならわたしたちはロバと縞馬との類似（強情であるなど）についての因果論的（たとえば

遺伝学的) な知識がないからだ。このようにパースは議論している。ロバは縞馬の指標記号ではなく、類似記号だとパースは主張する。「遺伝的類縁そのものは・・・推測にすぎず、・・・われわれは・・・知識を持っていない」のがその理由である。

わたしはこの議論は間違っていると思う。写真の因果論をわれわれは(ほとんどの者は)知っていない——「因果論的關係がある筈だ」ということに確信をもっているだけなのだ。これこそが人間化された因果論であることを思い出していただきたい。さて、風見鶏の例を思いかえそう——「どうしても方向は風に結びついていると考えざるをえない、といった具合にわれわれ人間ができていくからである」とパースは言う。ロバと縞馬もそんな風に(因果関係を連想する風に)われわれが出来ていると言えるならば、そのときロバは縞馬の指標記号なのだ。

4-3. 反事実的条件法

「その1」論文で導入した、より正確には「透明な絵」の中でウォルトンが導入した「反事実的条件法」は、じつは、この論文でわたしが強調している「人間化した因果論」と同じものである、というのがこの論文の最後にわたしが主張したい点である。

簡単に反事実的条件法を復習しよう。ある全称命題が法則論的かどうかを問題にする中でウォルトンは反事実的条件法を導入する。たとえば「リトマス試験紙を赤くする物質はすべて酸性である」という全称命題は法則的であるのに、「すべてのアメリカ大統領は男性である」は法則論的には見えないという現象である。反事実的条件法はこの脈絡で導入された。「X は酸性であり、リトマス試験紙を赤くしたとしよう。もし「X が酸性でなければ、リトマス試験紙は赤くならなかっただろう」という予言はわたしたちを納得させる。この命題は法則論的であるのだ。Y は大統領であり、男性であるとして。この時「もし Y が男性でなかったならば、Y は大統領ではなかったであろう」という予想をわたしたちはしない。この命題は法則論的 (law-like) ではないのだ。」[中川 2018]。

指標記号が指標記号であるためには人間化された因果論が成立していなければならないというわたしの主張は、反事実的条件法と同じように「法則論的である」かどうかをチェックする仕方なのである。それはより(反事実的条件法より)直截的に信頼の問題として因果論を捉えているのである。

5. 結論

ブラグマティズムを論じる中で、伊藤は次のように言う：「パースにとっては、数学が論理学に先行する。これは、シンボルとしての記号に純化され形式化された論理学の体系が、シンボルに本質的に関与しているということであり、しかもシンボルはけっしてアイコンやインデックス的性格を完全には捨象できないということである」[伊藤 2016: loc 2669]。パースはすべての記号がそれぞれアイコン性、インデックス性、そして象徴

としての性格をもっていると考えていたようである。わたしの議論も、ある意味でそのような立場をとっている。絵画は見ようによっては指標記号であるし、見ようによっては類似記号であると。

一連の論文でわたしが打ち立てようとしたのは記号の進化論である。すなわち、すべての記号は指標記号として始まり、そのうちのあるものは類似記号となり（アイコン性をもちはじめ）、そのうちの、さらにあるものは象徴記号となるのである。

換言すれば次のようになる。恣意性は自然（因果）に基盤をもつ。それゆえ文化もまた自然に基盤をもつのだ、と。

引用文献

- Goodman, Nelson 1976 (1968) *Languages of Art.*: Hackett Pub Co Inc, 2nd edition.
- Popper, Karl 2002 (1963) *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge (Routledge Classics)*.: Routledge, 2nd edition.
- Walton, Kendall L. 1984 "Transparent Pictures: The Nature of Photographic Realism." *Critical Inquiry* Vol. 11 No. 3, pp. 246-277.
- 伊藤邦武 2016『プラグマティズム入門』（ちくま新書），筑摩書房.
- ドヴァール, C. 2017『パースの哲学について本当のことを知りたい人のために』, 勁草書房. (大沢秀介訳).
- 中川敏 2018「似ているとはどういうことか—模型の人類学（その1）」『人間科学研究科紀要』第44巻 187-205 頁, 3月.
- ハッキング, I. M. 1986『表現と介入—ボルヘスの幻想と新バーコン主義』, 産業図書. (渡辺博(訳)).
- パース, C・S・ 1986『記号学』第2巻（パース著作集），勁草書房. (内田種臣訳).

The Logic of Iconicity: Anthropology of Models (2)

Satoshi NAKAGAWA

This paper is a sequel to my 2018 paper, “What Is This Thing Called “Resemblance”: An Essay in the Anthropology of Models” [Nakagawa 2018]. Similarly to the previous one, this paper too aims to explicate the idea of what it is like for something to resemble something else, this time focusing on the concept of the icon by Charles S. Pierce. The “icon” is one of a triplet of ideas contrived by Pierce: icon, index, and symbol.

I contrast Pierce's semiotics against de Saussure's semiology (aka “structuralism”), emphasizing the naturalism of the former against the conventionalism or culturalism, so to speak, of the latter. Structuralism's central dogma is “arbitrariness,” which guarantees the independence of the realm of culture from that of nature, which is, supposedly, governed by the laws of natural sciences.

Employing Pierce's semiotics, instead of de Saussure's semiology, implies that we are going to abandon the independence of culture from nature. Thus, we are attempting to explain anything cultural in terms of the laws of natural sciences. To this end, we have to explicate the vague concept of the icon in Pierce's terminology. I endeavor to explain the concept of the icon in terms of index and abduction, with some help from the arguments of Popper in his treatise on inferences [Popper 2002 (1963)].

I propose a kind of evolutionary theory of signs: first there are only indexes; then some of the indexes become icons; and finally, some of these icons become symbols. In short, arbitrariness comes from nature; further, culture too comes from nature.